

訪問看護実習マナーに対する看護学生の認識 —講義前後における変化からの一考察—

Recognition of Nursing Students for Manners of Visiting nursing practice —A Study of the Change Before and After the Lecture—

森山 恵美* 上ノ町 成子* 關 優美子**

Emi MORIYAMA, Nariko UENOMACHI, Yumiko SEKI

*神奈川歯科大学短期大学部 看護学科

**東京家政大学大学院後期博士課程

キーワード：看護学生 訪問看護実習 マナー 認識

I. はじめに

訪問看護は、在宅療養者本人および家族が暮らす自宅において展開される看護である。医療者のテリトリーである病院から療養者のテリトリーである自宅に看護の場が移る時、医療者には医療行為を実施する以前に、他者の家を訪問する際のマナーが求められる。ゴッフマン¹⁾は「法律などの実体的ルールに対して、マナーやエチケットは儀礼的ルールであり、人が他者に対して無礼な言葉や態度で相手を著しく傷つけるなど、コミュニケーションを阻害する行動を規制するルールである」と述べている。佐々木²⁾もマナーについて「お辞儀を例にとってもわかるように相手に対する敬意の表現であり、人間関係を円滑にし、社会的秩序を守る上で重要な意味を持つものである。また、公式の場におけるふるまいは、その人の評価につながる重要な要素である」と述べている。対人関係援助行為である看護そのものにマナーは不可欠であるが、訪問看護には「看護を行う看護師と看護を受ける対象者」の関係だけでなく「訪問者と家人」という人間関係も同時に存在することからマナーは重要なものとなっている。

これは、訪問看護師に同行し訪問看護実習をする看護学生にも共通することである。しかし、実際の実習場面では挨拶、返事、態度といったマナーができていないことも少なくない。学生にとっては、初めての訪問先に加え、初対面の療養者や家族に対する緊張から、普段通りの振る舞いができないことも考えられるが、青年期である学生は日常生活においてマナーを意識すること自体が少なく、特に目上の人に対するマナーを知識としても知

らない学生も多い。また、訪問看護実習マナーに関する研究は、その多くが「家庭訪問中」に限定されたマナーに焦点を当てており^{3)~5)}、訪問前から訪問後までを含む訪問看護実習全体における研究は見当たらなかった。そこで筆者らは、訪問看護実習マナーに関して訪問看護ステーションで学生指導を担当する訪問看護師を対象とした調査研究を実施した⁶⁾。その結果、多くの学生ができていないマナーとできていないマナーとが明らかになったため、これをもとに訪問看護実習マナー学習教材としてのDVDを作成した。今回、このDVD学習も取り入れた講義前後における学生の訪問看護実習マナーの認識の変化を明らかにすることで、今後の効果的な教育の在り方を検討する一助となると考え本研究に取り組んだ。

II. 目的

訪問看護実習マナーについて、講義前後の看護学生の認識を比較し、効果的なマナー教育を検討するための資料とする。

III. 方法

- 1) 期間：2013年4月9日～2013年10月7日
- 2) 対象：A短期大学看護学科2年生92名
- 3) 方法：在宅看護学領域の講義（3科目合計90時間）開始前と講義が終了し技術演習実施前の2度同じ質問調査を行った。無記名自記式質問紙を直接配布し、記入後、回収ボックスを設置して回収した。尚、講義の中で自作の訪問看護実習マナーDVD（20分）を1回視聴した。DVDの内容は、指導者である訪問看護師の指導を受ける学生の視点に立った、家庭訪問前、家庭訪問中、家庭訪問後それぞれの場面におけるマナー

の実際と、不適切なマナー例13場面である(表1参照)。

- 4) 内容:訪問看護実習において「訪問前」「訪問中」「訪問後」それぞれに大切だと考えるマナーについて自由記述を求めた。
- 5) 分析方法:学生が回答した自由記述内容を訪問看護実習マナーチェックリストと照合し、回答記述中に記されたマナー項目と記されなかったマナー項目とを分類した。マナーチェックリストの項目は、看護学生の訪問看護実習マナーについて「日本看護協会研修センター第3回訪問看護指導者研修会」が作成した「訪問看護師の基本的態度(チェックリスト)」を基盤に学生実習の特性を鑑み研究者間で検討を重ね追加修正を加えた72項目とした(訪問前33項目、訪問中31項目、訪問後8項目)。項目毎に講義前後における記述人数割合の有意差の有無を求め、講義後については項目間の記述人数割合の相関の有無を求めた。有意差についてはカイ二乗検定の結果セルの期待度数が5%未満であったためフィッシャーの正確検定を行った。有意確率は5%水準とした。分析には統計解析ソフトSPSS(Ver.21)を使用した。

IV. 倫理的配慮

対象者には研究目的、研究協力の自由及び成績に一切影響しないこと、匿名性の確保、回答は研究のみに使用すること、回収用紙の厳重管理と裁断処理、研究結果の公表について文書と口頭にて説明し、質問紙の提出をもって同意とみなす旨の説明をした。また本研究は神奈川県川崎大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

V. 結果

回収数は講義前61(回収率66.3%)、講義後69(回収率75.0%)であり全てが有効回答であった。

1人あたりの平均記述項目数は、講義前4.3個(最多

10、最小1)講義後12.6個(最多33、最小1)であった(表2)。講義前後の項目別記述人数割合は表3~表5の通りであった。72項目の中で最も記述人数割合が多かった項目内容は、講義前では「訪問前・職員に自分から挨拶する」(43人・70.5%)、講義後では「訪問後・報告、連絡、相談をきちんと行う」(47人・67.1%)であり、記述人数が0であった項目数は講義前29項目、講義後6項目であった。講義前後で有意差が認められた項目は40項目(訪問前19項目、訪問中16項目、訪問後5項目)であり、うち36項目は講義前に比べ講義後、有意に記述人数が増加しており、中でも訪問前の「身だしなみ」に関する項目においては13項目中13項目すべてにおいて有意な増加が認められた。講義前に比べ講義後、有意に記述人数が減少した項目は4項目であり「(訪問前)職員に自分から挨拶する」「(訪問前)指導者やスタッフの話をきちんと

表2 学生1人当たりの記述マナー項目数

	最少	最多	平均
講義前(n=61)	1	10	4.3
講義後(n=69)	1	33	12.6

(個)

表3 家庭訪問前 実習マナー項目別学生記述人数割合

評価項目		前(%) n=61	後(%) n=69	p値 *p<.05 **p<.01
身だしなみ	身だしなみをきちんと整える	19.7	47.8	0.001**
	指定の実習用服装	6.6	24.6	0.008**
	清潔な髪形	1.6	27.5	0.000**
	不快を与えない適切な化粧	0.0	13.0	0.003**
	健康的な顔色を保つ	0.0	14.5	0.002**
	装飾品や香水をつけない	0.0	13.0	0.003**
	手の爪は短くマニキュアをしない	0.0	20.3	0.000**
	足の爪にペティキュアをしない	0.0	17.4	0.000**
	清潔な服装	1.6	26.1	0.000**
	下着が透けたりかんだときに見えない	0.0	20.3	0.000**
	靴下は汚れや破れがない	0.0	20.3	0.000**
	服や靴下の色が派手ではない	0.0	21.7	0.000**
	タバコのおいをさせない	0.0	10.1	0.014*
挨拶	職員に自分から挨拶する	70.5	47.8	0.012*
	きちんとお辞儀する	0.0	0.0	
	自然な笑顔	4.9	4.3	1.000
	明るい表情で挨拶する	3.3	5.8	0.684
	適度な声の大きさと挨拶する	1.6	7.2	0.213
言葉遣い・コミュニケーション	柔らかな目線(アイコンタクト)で挨拶する	1.6	0.0	0.469
	語先後礼	0.0	1.4	1.000
	指導者やスタッフの話をきちんと聴く	9.8	0.0	0.009**
	はっきり最後まで自分の言葉で話す	3.3	11.6	0.102
	わかったか否かをはっきり相手に伝える	16.4	14.5	0.811
	正しい敬語を使う	21.3	39.1	0.036*
	相手と視線を合わせて会話する	0.0	0.0	
	謙虚な態度でコミュニケーションをとる	11.5	13.0	1.000
	私語を慎む	18.0	1.4	0.001**
	学生間でも節度ある言葉遣いをする	0.0	5.8	0.122
姿勢・態度	遅刻をしない	4.9	13.0	0.136
	忘れ物をしない	1.6	17.4	0.003**
	時間の観念を持ち早めの行動をする	9.8	14.5	0.594
	指導者の配慮(車への同乗等)に感謝を表す	0.0	18.8	0.000**
	自分の課題を持って訪問に臨む	23.0	27.5	0.585

表1 訪問看護実習マナー自作DVD内容

1 訪問前	1-1) 身だしなみ
	1-2) 朝の挨拶
	1-3) 実習計画発表準備
	1-4) 訪問準備(持ち物確認)
	1-5) 車の乗り方
2 訪問中	2-1) 訪問宅前での確認事項
	2-2) 玄関での挨拶
	2-3) 玄関の上がり方
	2-4) 手洗い
	2-5) 療養者への自己紹介
	2-6) バイタルサイン測定
	2-7) 座る位置、姿勢
	2-8) 帰りの挨拶
3 訪問後	3-1) 訪問看護ステーションに戻ったときの挨拶
	3-2) 報告
	3-3) 実習終了時の挨拶

表4 家庭訪問中 実習マナー項目別学生記述人数割合

評価項目		前(%) n=61	後(%) n=69	p値 *p<.05 **p<.01
立ち居振舞い	機敏に行動する	9.8	4.3	0.304
	玄関に入る前に身支度を確認する	6.6	18.8	0.066
	ドアの開閉が静かに行う	0.0	0.0	
	靴の脱ぎ方を正しい方法とする	1.6	11.6	0.036*
	玄関で脱いだ靴をそろえる	1.6	42.0	0.000**
	なれなれしく家にながらない	0.0	11.6	0.007**
	廊下や室内は静かに歩く	1.6	8.7	0.120
	周りをきよきよ見回さない	3.3	30.4	0.000**
	勝手に家の中の物に触れない	32.8	11.6	0.005**
	勝手に私物を部屋の中に置かない	3.3	2.9	1.000
挨拶	利用者や家族に自分から挨拶する	42.6	59.4	0.056
	自分の身分をきちんと述べる	0.0	2.9	0.498
	きちんとお辞儀する	0.0	10.1	0.014*
	自然な笑顔	8.2	21.7	0.050
	明るい表情で挨拶する	3.3	18.8	0.006**
	相手に合わせた声の大きさと挨拶する	0.0	13.0	0.003**
	柔らかな目線(アイコンタクト)で挨拶する	0.0	8.7	0.029*
	語先後礼	0.0	5.8	0.122
	相手の話をきちんと聴く	6.6	30.4	0.001**
	自分から話す	4.9	15.9	0.051
言葉遣い・コミュニケーション	正しい敬語を使う	14.8	21.7	0.368
	相手と目線の高さを合わせて会話する	0.0	17.4	0.000**
	謙虚な態度でコミュニケーションをとる	3.3	15.9	0.019**
	専門的知識を自己判断で話さない	1.6	8.7	0.120
	質問攻めにならないよう配慮する	6.6	10.1	0.540
	相手が気分を害する会話はしない	6.6	2.9	0.000**
	背筋を伸ばしよい姿勢を保つ	1.6	5.8	0.370
	ケアの介入に積極性を持つ	8.2	39.1	0.000**
	ケアの準備や後片付けをする	0.0	31.9	0.000**
	感染防止(手洗い等)行動が適切にする	0.0	33.3	0.000**
安全に配慮する	3.3	11.6	0.102	

表5 家庭訪問後 実習マナー項目別学生記述人数割合

評価項目		前(%) n=61	後(%) n=69	p値 *p<.05 **p<.01
倫理安全	使用物品を整理する	0.0	43.5	0.000**
	利用者宅などに忘れ物をしない	0.0	26.1	0.000**
	ステーションに戻ってから手洗いをする	0.0	7.2	0.060
	守秘義務を守る(記録の書き方など)	23.0	23.2	0.974
姿勢・態度	報告・連絡・相談をきちんと行う	1.6	68.1	0.000**
	助言を謙虚に受け止める	0.0	23.2	0.000**
	自分の価値判断で利用者を評価しない	0.0	0.0	
	訪問後にも自己学習をする	0.0	18.8	0.000**

と聴く」「(訪問前) 私語を慎む」「(訪問中) 勝手に家の中の物に触れない」であった。

項目間の相関について、最も多くの項目と相関がみられた項目は「(訪問前) 自己の課題を持ち訪問に臨む」であり、「(訪問前) タバコのおいさをさせない」「(訪問前) 装飾品や香水をつけない」「(訪問前) はっきり最後まで自分の言葉で話す」「(訪問前) 謙虚な態度でコミュニケーションをとる」「(訪問中) 相手に合わせた声の大きさと挨拶する」の5項目との間で相関がみられた(表6)。次いで多くの項目と相関がみられた項目は「(訪問中) 専門的知識が必要な内容について自己判断で話さな

表6 項目「自己の課題を持ち訪問に臨む」と他項目との相関係数

	タバコのおいさをさせない	装飾品や香水をつけない	はっきり最後まで自分の言葉で話す	謙虚な態度でコミュニケーションを取る	相手に合わせた声の大きさと挨拶する
自己の課題を持ち訪問に臨む	.330**	.258**	.229**	.211*	.258**

* < .05 ** < .01

い」であり、「(訪問前) 忘れ物をしない」「(訪問中) ケアの準備や後片付けをする」「(訪問中) ケアの介入に積極性を持つ」「(訪問後) 利用者宅などに忘れ物をしない」の4項目との間で相関がみられた(表7)。

VI. 考察

学生が大切だと考える訪問看護実習マナー項目の記述数は講義前に比べ講義後に増加しているが1人あたりの平均増加項目数は8.3個にとどまった。また講義後において記述人数0の項目が6項目あり、記述人数割合が10%未満の項目と併せると35項目となり、全項目数の約半数を占める。このことから講義だけで学生が十分にマナーを認識することは困難であると考えられ、学内での演習体験等により理解を深められるような教授方法の工夫は重要であるといえる。吉川ら⁷⁾も在宅看護演習の重要性について「(学生は) 在宅日常生活技術は単純に基礎看護技術を応用するだけではないと実感した時から習得に対する危機感を強め、一中略— 利用者家族に介護指導を理解してもらうための難しさに気付くことができた。その気付きから、利用者家族に訪問者として受け入れてもらうために、マナーが身につけている必要があると在宅という場の特徴を学ぶことが出来たと言える。」と述べている。

しかし項目内容別にみみると「身だしなみ」関連の全項目における記述人数は講義後に有意に増加しており、この要因としてDVDで実習時の服装を具体的にイメージできたことが考えられる。身だしなみに関しては

表7 項目「専門知識が必要な内容について自己判断で話さない」と他項目との相関係数

	忘れ物をしない	ケアの準備や後片付けをする	ケアの介入に積極性を持つ	利用者宅などに忘れ物をしない
専門知識が必要な内容について自己判断で話さない	.261**	.347**	.259**	.200*

* < .05 ** < .01

DVDにおいて終始学生役が登場しているため自然に目に入るだけでなく、「良くない例」も提示しているため記憶に残りやすかったと推測される。ただし、多くの学生が「身だしなみをきちんと整える」という表現のみで具体的な記述がないことから、今後、身だしなみの具体的な内容についても学生の理解を確認していく必要がある。特に訪問看護においては、看護者は利用者と家族の自宅に外部から訪問し招き入れて頂くという立場であることから、身だしなみ1つをとっても利用者や家族が快く受け入れることができるか否かという視点で考えることが重要であり、単に教員に指示されたからという受動的な態度でなく、主体的に利用者や家族の思いを考えられるような教育が重要であると考えられる。

反対に記述人数が講義後有意に減少した項目の減少要因として、「職員に自分から挨拶する」「指導者やスタッフの話をきちんと聴く」「私語を慎む」の3項目については全ての看護学実習に共通なマナーであり講義後の学生にとって訪問看護独自のマナーという認識が薄れたためと考えられる。また「勝手に家の中の物に触れない」についてはDVDの訪問事例場面に、家の中の物に触れるという場面がなかったため、認識が薄れたことが要因の一つに考えられる。視聴覚教材には、インパクトがあり映像がそのまま記憶に残りやすいという利点がある一方で、視聴覚教材のイメージばかりが強い印象となり、文章や講義による他の認識が薄れる危険性をもはらんでいることが浮き彫りになった。また1回のみ視聴では、教授する側が伝えたい内容と学生が認識できる内容に相違があることも考えられるため、直接の解説を交えながら複数回視聴できることが望ましいと考える。

多くの項目と相関がみられた「(訪問前) 自己の課題を持ち訪問に臨む」「(訪問中) 専門的知識が必要な内容について自己判断で話さない」の2項目については、これらの項目を必要なマナーとして認識できる学生は他の様々なマナーも認識できることを示している。また、これらの2項目は筆者らが訪問看護実習指導者を対象に行った調査研究⁸⁾において「訪問看護実習に臨む看護学生に重要なマナー」として報告した項目とも一致していた。このことから、「(訪問前) 自己の課題を持ち訪問に臨む」「(訪問中) 専門的知識が必要な内容について自己判断で話さない」のマナー項目は、訪問看護実習指導者が重要と捉えているのみならず、学生のマナー習得のポイントとなる重要項目であると考えられる。

Ⅶ. 結論

1. 訪問看護実習マナーの教授法として講義のみでは不十分であるが、視覚により具体的なイメージが持てるマナー内容については視聴覚教材が有効である。
2. 「自己の課題を持ち実習に臨む」と「専門的知識が

必要な内容について自己判断で話さない」は学生が訪問看護実習マナーを認識する上で重要なマナーである。

今後の課題

本研究により、オリジナルのDVDを用いた訪問看護実習マナー教育にはある程度の効果があることが示唆された。この結果を踏まえDVDの改良も含めさらに効果的な訪問看護実習マナーの教授方法を探っていきたい。

謝辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) Goffman, E. : INTERACTION RITUAL. Essay on Faceto-Face Behaviour. 1967, 広瀬英彦・安江孝司訳, 儀礼としての相互行為, p.198, 法政大学出版局, 1986.
- 2) 佐々木真由美: 現代青年のマナー観について — 礼儀作法の形成過程 —, 北海学園大学大学院経営学研究科 研究論集 (10), p.25-37, 2012.
- 3) 藤田京子, 五十嵐依子, 高橋明美 他: 看護学生における訪問マナーの認識度, 日本看護学会論文集(地域看護), 37, p.117-119, 2006.
- 4) 小暮智子, 藤田京子, 五十嵐依子ほか: 訪問マナーに関する訪問看護師と看護学生との認識の差異, 日本看護学会論文集(地域看護), 38, p.61-63, 2007.
- 5) 戸塚智美, 井上真弓: 訪問マナー演習の学習効果, 横浜創英短期大学紀要, 5, p.63-71, 2009.
- 6) 森山恵美, 關優美子: 訪問看護実習における学生のマナーの実態, 第44回日本看護学会論文集(地域看護), p.197-200, 2014.
- 7) 吉川峰子・関陸美: 在宅看護技術演習における学びの評価 — 日常生活援助技術に焦点を当てて —, 第44回日本看護学会論文集(看護教育), p.38-41, 2014.
- 8) 前掲書6)

著者への連絡先: 森山恵美 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部 看護学科

TEL: 046-822-8772 FAX: 046-822-8787

E-mail: moriyama@kdu.ac.jp